# 2019（平成31）年度入学試験問題

# 国　語

（注意）解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

盈進高等学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人が本を読まなくなった。あれほど堅固に見えた〈紙の本〉への信頼感がぐらりと揺らいだように思える。このさき私たちの読書環境はどう変わってしまうのだろうか。

こうした不安をもたらした犯人はデジタル革命だという説があります。ゲームやSNSのせいだとか、なにもかもインターネットがわるいのだとか――。

でも、はたしてそう簡単にいいきってしまえるのかどうか。

だいいち若者の「本ばなれ」が顕著になった七〇年代末には、デジタル時代はまだ緒についたばかり。戦後初めての本の総売上がカコウ[a]に転じたのも、インターネットや携帯電話が広く定着したのも、すべて九〇年代が終わり近くなってからのことなのです。であるからには、どう考えても読書習慣のおとろえの責任をまるごとデジタル革命に負わせることにはむりがある。それよりも、このおとろえは二十世紀後半、デジタル革命の開始以前に、①〈紙の本〉の世界の内側で徐々に醸成（じょうせい）されてきたと考えておくほうが、よほど自然なのではないだろうか。

もうひとついえば、②新しく興隆したメディアが〈紙の本〉をほろぼすという危機の構図にしても、それ自体は新しいものではなく、すでに出版産業化が本格化した一九二〇年代にはすがたを現していました。このときの本の敵は映画（無声映画）です。A チェコの人気作家でジャーナリストのカレル・チャペック。かれは一九二五年に、早くも成熟期に足を踏み入れた映画の力をたたえて、これからは本を読む「概念的タイプ（老年世代）」にかわって映画で再教育された「視覚型人間（現代の人間）」が増えてゆくだろう、と予言していた。

読書タイプの人間は忍耐強い。周囲の状況を認識し、事件の記録のなかに腰を据え、話を最初から最後までたどっていくだけの十分な時間を取る。視覚的タイプはそれほど忍耐強くありません。状況を一目でハアク[b]し、時間をかけずに話の筋を飲み込んでしまいたがります。そして、次の瞬間にはもう新しい何かを物色しているのです。しかし、もしかしたら、③たっぷり息を吸うために、映像の急流から逃れ、本に戻る人も出てくるかもしれません。（略）多分ね、そんなこと誰にわかるのです?――多分、書物はだんだんと死に絶えていくでしょう。もしかしたらバビロンの文字の書かれた煉瓦（れんが）のように奇妙な記念碑になるでしょう。でも、芸術は死に絶えることはありません。

（「目の世代」）

文脈がすこしコンランしているので、チャペックが「本に戻る人」に批評的な距離をおいているようにも読めます。でも、たぶんそうじゃないな。かれが人間をつくりかえる映画特有のスピード感に魅せられていたのは事実でしょうが、それと同時に、ねばりづよく「周囲の状況を認識」し、十分な時間をかけて「最初から最後まで」話につきあうという「読書タイプの人間」の習性にも、おなじくらい、もしくはそれ以上につよく共感していた。チャペックが同時期に書いたいくつかのエッセイから見ても、かれのうちに「進歩する人間」とならんで、ひとりの確信的な「B」がいたことはあまりにもあきらかなのです。

そして、このチャペックのうちなる「読書タイプの人間」と「視覚型人間」との葛藤の劇が、百年後、映画をインターネットに、「視覚型人間」を「デジタル型人間」におきかえて、そっくりそのまま繰りかえされます。私の場合でいえば、数年まえ、たまたま雑誌で津村記久子の「咳と熟読」という文章を読み、おや、おれは以前、これと似たようなことをどこかで読んだことがあるぞと、チャペックのこのエッセイのことを思いだした。

津村の「咳と熟読」によると、いっとき本をはなれてインターネットに熱中した彼女は、やがてネット情報の「瞬間湯沸かし」的な収集に疲れて、ふたたび本を読むようになったらしい。「情報」をいそがしく「脳味噌に注入」するかのごとき「飽和状態」のなかで④逆説的に、自分が本から得ていた主な栄養は『情報』ではないのだな」と気づいたというのです。

本を読み始めた頃、読むことは、ひたすら体験だった。図書室で借りてきた本のぼろぼろさ加減とその物語は、一体のものとなって記憶されている。喘息の発作の後、親にカれて本を読んでいる自分自身もまた、物語の一部だったように思える。ああ、『チム・ラビットのぼうけん』はおもしろかったなあ、と思い出す時は、必ず、小学二年の時に住んでいたマンションの六畳の寝室と、窓から差し込む昼間の光と、苦かった薬と裏腹に魅力的だった吸入器の味のことを思い出す。

そういう、体を伴った読書を再び求める。

ネット情報とのつきあいに疲弊して「読書を再び求める」ようになった。つまりはそういうこと。彼女もまた、チャペックがいう「たっぷり息を吸うために、映像〔情報〕の急流から逃れ、本に戻る人」のひとりだったのです。

チャペックと津村記久子――。

この二人の作家の百年の時をへだてた体験をならべてみると、〈読書の黄金時代〉としての二十世紀が、じつは終始、C 安定したものでありつづけていたわけではないことがわかります。いかにも私たちは、いまデジタル革命の衝撃で〈紙の本〉がはじめて危機にさらされているように感じている。でもちがうんですね。チャペックによると、すでに前世紀の二〇年代、〈読書の黄金時代〉がその盛期にさしかかろうとするころには、映画の成熟によって、かれ自身をふくむ本好きたちまでが、いち早く、その危機をヨカンするようになっていたらしい。e

そして、この点にかかわってもうひとつ見すごしてならないのが、この危機が同時に〈紙の本〉の力を人びとが発見しなおす機会になったということです。

日用品としての本に慣れすぎて、私たちはともすればそのありがた味をわすれてしまう。そんなとき、不意に衝撃的なにごとかにぶつかり、忘れていたありがた味を新鮮なものとして見つけなおす。〈読書の黄金時代〉前半期での「なにごとか」は映画でしたが、それに匹敵する後半期のできごとがインターネットの出現です。そして映画の場合と同様に、今回も新しい「なにごとか」に震撼（しんかん）させられた〈紙の本〉が、逆に、あわただしい情報ラッシュに疲れはてた人間がそこに戻ってゆく代替のきかない強力な場として再発見される。それがチャペックの「本に戻る」だったし、津村記久子のいう「読書を再び求める」でもあるのでしょう。

そういえばこの点については、以前もいちど「書物史の第三の革命」という文章で、二十一世紀のゼロ年代に教師として若い学生たちとつきあった経験にもとづいて、多少くわしく論じたことがあります。

いまの学生はたしかにあまり本を読まない。だからといってかれらが「もう本なんかなくてもいいや」と考えているのかといえばさにあらず。教室でなんどか試みたアンケートによると、D「なくなっては困る」と感じている者のほうが圧倒的に多いのです。そこで「なぜ困るの？」ときくと、たいていは「毎日の暮らしのなかで、いまあるような本とつきあうことの楽しみをなくしたくない」という意味の答えがもどってくる。

「紙の本にさわったり、めくったりするときのいい感じを捨ててしまうのはもったいない」

「じぶんの本棚に好きな本がならんでるのを見ていると、なんとなく安心するんです」

「本って記憶ですよね。夕方、どこかの町の喫茶店の窓際の席であの本を読んだなとか、本にはそれを読んだときの記憶がくっついてるでしょ」

なのにインターネット経由、ケータイやスマートフォンで読む本（つまり電子本）には、そうした一切がかけている。⑤あれはやっぱり読書とはいえないんじゃないですか、というのですね。

だから、やはり津村のいう「体を伴った読書」なのですよ。〈紙の本〉は一点一点がべつの顔、べつの外見をもっている。しかし〈電子の本〉では、すべての表現が特定の企業や特定の技術者がつくったハードやソフトの平面に均(なら)されてしまう。ＳＦＸ映画みたいなもので、どれも同じような味しかしないから、いずれは飽きる。それに飽きたり疲れたりした者がふたたび〈紙の本〉に向かう。すなわち「体を伴った読書」にもどる。そしてそこでは一点一点の本の個別性や多様性がきちんと保持されている。そうじゃないとみんなが困るのです。

もちろん実際には、かれらはあまり本を読んでいません。ただし毎日新聞社が戦後つづけてきた読書調査によると、近年は、「このごろの若い連中はちっとも本を読まない」となげく老人たちのほうが若者以上に本を読んでいないらしい。とすれば、なにも「若い連中」にかぎらない。中高年をふくむすべての日本人がしだいに本を読まなくなるなかで、かれらも本を読まなくなった。そう考えておくほうがより正確なようなのです。

（津野海太郎『読書と日本人』による）

**問一**　二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。（楷書で大きくていねいに書くこと）

**問二**　［A］・［C］・［D］に入る語句として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　むしろ　　イ　かならずしも　　ウ　たとえば　　エ　つまり

**問三**　傍線部①「〈紙の本〉の世界の内側で徐々に醸成されてきた」とありますが、「醸成されてきた」ものとは何ですか。本文中から九字で抜き出しなさい。

**問四**　傍線部②「新しく興隆したメディアが〈紙の本〉をほろぼす」とありますが、「インターネット」よりも以前に〈紙の本〉をほろぼした「メディア」を本文中から抜き出しなさい。

**問五**　傍線部③「たっぷり息を吸う」とはどういうことですか。その説明として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　さらに必要な情報を大量に取り込むこと。　　イ　じっくり時間をかけて読み解くこと。

ウ　読書にふたたび戻るのをあきらめること。　　エ　新しい分野の情報を探し求めること。

**問六**　［B］に当てはまる語句を本文中から五字で抜き出しなさい。

**問七**　傍線部④「逆説的に、自分が本から得ていた主な栄養は『情報』ではないのだな」とはどういうことですか。その説明として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　インターネットに熱中し、「瞬間湯沸かし」的な情報の収集をするうちに、インターネットは栄養が多すぎることに気づいたということ。

イ　いっときインターネットをはなれて〈紙の本〉に戻ることによって、インターネットから得た情報が栄養となることに気づいたということ。

ウ　〈紙の本〉もインターネットも情報を一気に「脳味噌に注入」することについては、同じような効果をもつものだと気づいたということ。

エ　インターネットから情報を大量に得ることによって、〈紙の本〉から得ていた重要なものが「情報」だけではないことに気づいたということ。

**問八**　傍線部⑤「あれはやっぱり読書とはいえないんじゃないですか」とありますが、筆者の考える「読書」についてまとめた次の文の空欄に入る語句を、指示された字数に合わせて本文中から抜き出しなさい。

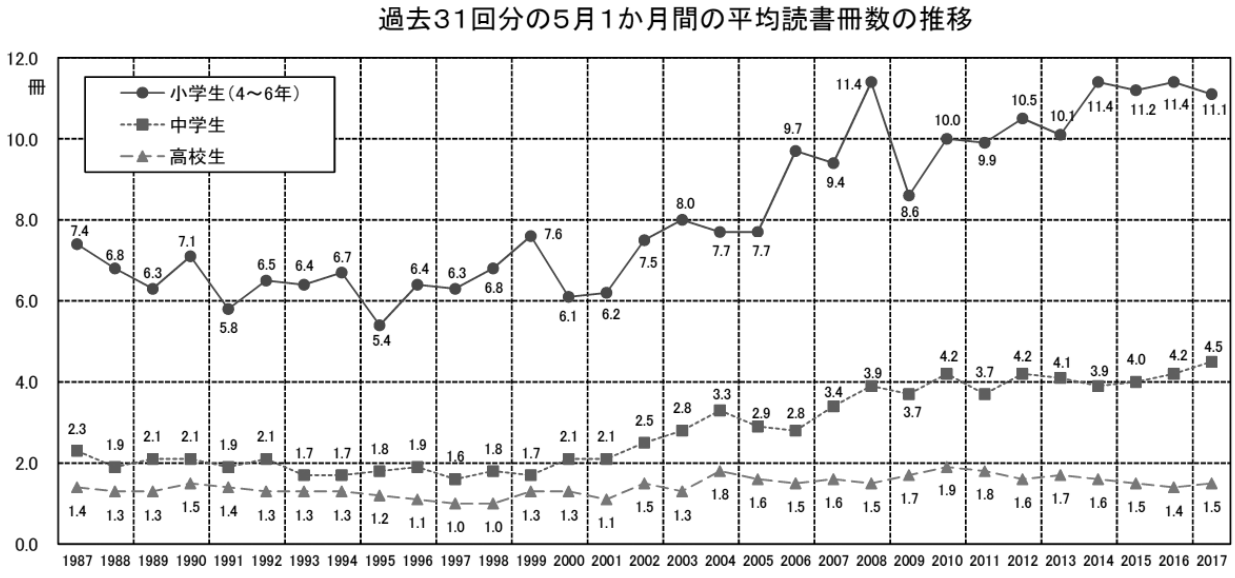
読んだときの［X（二字）］がくっついており、一点一点の本の［Y（三字）］や多様性がきちんと保持されている「［Z（七字）］」となるもの。

**問九**　伊藤さんと鈴木くんと田中さんの三人は、この文章を読んだ後、【五月一か月間に読んだ本の冊数について調査したグラフ】を見ながら会話をしています。後の問いに答えなさい。

（1）　［α］について、グラフからわかることを空欄にあてはまるように十字以上二十字以内で答えなさい。

（2）　［β］に当てはまる言葉を、【三人の会話】の流れに合うように考えて答えなさい。

【五月一か月間に読んだ本の冊数について調査したグラフ】




（公益社団法人全国学校図書館協議会のウェブページによる）

【三人の会話】

（伊藤さん）この文章の冒頭に「人が本を読まなくなった」とあるけど、わたしは本をよく読んでるわよ。

（鈴木くん）ぼくはあまり読まないなあ。読んでも「朝の読書タイム」で読むくらいかな。

（田中さん）でも、グラフを見ると小中学生は二〇〇〇年代に入ってから［　α　］ね。

（伊藤さん）わたしは〈紙の本〉で読むのが好きだけど、みんなはどうなのかな？

（鈴木くん）ぼくはスマートフォンで読むほうが多いかな。両親も〈電子の本〉を読むことが多いよ。

（伊藤さん）だけど、〈電子の本〉って、少し味気ないのよね。本をめくる感触がしないし。

（田中さん）そうかな？でも〈電子の本〉にも［　β　］。

二　次の文章は瀬戸内海の小さな島を舞台とした作品の一部です。航太は、けがをして高校最後のバスケットボールの大会出場をあきらめました。その後同級生の日向子（ひなこ）に誘われ、俳句甲子園出場を目指しています。そうした中、祖母が急に倒れ入院します。以下の場面はその続きです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「親父」航太はすわり直す。「おれは本気で頼んでる。この店をa継がせてくれ。島を出て製菓学校へ行かせてくれ。この金を使わせてもらえれば……」

「駄目だ」

途中でさえぎられて、冷静でいるつもりだったのに、航太はつい声が高くなる。

「どうしてさ？　どうして、親父、そんなに頑固に反対するのさ？」

「なら逆に聞くが、航太、お前は誰に菓子を売っていくつもりだ？」

「誰にって……、今までどおりb お得意さん相手に商売を続ければいいじゃないか」

①親父は、航太の返事の途中から首を振り始めていた。そして、なおも首を振りながら言う。

「航太、うちのお得意さんの年齢を考えろ」

「年齢？」

「うちのばあちゃんの知り合いばかりだろう？」

言われて気がついた。

――あの敬老会メンバーがいなくなったらうちの売り上げがA減りそう。

前に恵一相手にそんな軽口をたたいていたくせに、自分の身に起こることとして実感を持って考えたことがなかった。

「ばあちゃんがこういうことになったが、現実に、ばあちゃんの知り合いもこれから減っていく」

「じゃあさ、新しいお客さんを呼び込んで……」

「どこから？」

②航太は返事にまた詰まる。分校さえ廃校に追い込まれるような島だ。航太たちの二歳年下から下の世代は、十五歳で島の外での生活を始める。島から通う子どもばかりではない、本土に下宿する子だっているだろう。たとえ島に寝に帰るような生活を送るとしても、ものと刺激(c)と人間がたくさんいる本土に、関心は移っていくはずだ。

そうしているうちに、老人は一人また一人とこの世を去っていく。年寄りばかりが多くなる島は、やがて年寄りさえいなくなる島になる。

「でも、でもさ、親父の世代はまだまだ島で生活してるだろ？　働き盛りの大人たちがさ……」

親父は［B］笑った。

「実は、島で一番の金持ちの連中は年寄りなんだよ。なんて言ったって年金がもらえるからな。だから年寄りたちは、菓子を買うような小さな贅沢(ぜいたく)はできるんだ。今さら教育費だ娯楽費(d)だというような使い道もないし、島なら遊ぶ金もいらない。どんどん金が飛んでいくおれたちの年頃が、一番③世知辛いよ。そうして、節約したい人はわざわざ和菓子なんぞ買わない」

「そんなことないじゃないか、おじさんやおばさんも結構買ってくれるだろ。恵一のところはあんまり来ないけど、ほら、山向こうの漁師のおじさんとか、手広く農家をやってる人とか……」

親父はどこか痛そうな顔をした。

「あれは④相身互(あいみたが)いの取引だよ」

「相身互い？　どういう意味だ？」

「おれの作る菓子は、まあ、うまい。第一、島で和菓子を作っているのはおれ一人だ」

「うん、それで？」

「だが、和菓子は日持ちがしない。作ったものはその日のうちに売り切らなくちゃならない。いつ頃からだろうな、売れ残った菓子を、そういう友だちのところに持っていくようになったんだ」

親父はそう言って、ほかにも何人かの名前を挙げた。どれも下の名に「ちゃん」をつけて呼び合うような、親父の四十年来の幼馴染(おさなじみ)だ。

「そうして向こうからはお返しにと、その日市場に出せなかった魚やエビや、野菜が来る」

「え、それって……。うちはそういうおこぼれをもらって食っているってこと？」

「おこぼれじゃない」

親父はきつい目になった。「だから相身互いと言ったろう。市場では扱ってくれない雑魚、サイズが小さい鯛、ひげの取れたエビ。曲がったキュウリ、熟れすぎたトマト。漁師や農家でもて余すものと、おれの菓子と、どちらも互いに喜ばれ、互いを補い合ってる。いつからか、小市堂の菓子はそういう具合に使われるようになってきたんだ」

これで何度目だろう、航太は返事ができなくなった。

こんな小さな島としては、親父の上生菓子は高級すぎる。そう思ったことがないわけではない。

でも、その菓子がちゃんと売れていく。それは親父の菓子を島の人が評価してくれているからであり、一方では島の人たちの心の豊かさを示すものだ。小市堂が生き残れる五木島を、航太は誇りにしてきた。この前も病院で考えていたとおりに。

それがただの、余りもの交換だったとは。

親父はゆっくりと立ち上がった。

「先に風呂に入るぞ。進路のこと、よく考えておけ」

結局、次の日の面談で、航太は大学進学希望と初めて口に出した。

これから考えなければいけないことが色々あるらしい。今から準備して合格できそうな大学、そして四年間経済的に続くところを探すこと。学部は先々の就職に有利なように選ぶこと。ちゃんと給料をもらえる会社に就職できるように。

面談のあとで文芸部の部室に行っても、航太はぼんやりしていた。

「ほら、航太、いつにもまして⑤腑抜け顔じゃない。しゃんとして」

日向子に叱られても、来島京が心配そうな視線を送ってきても、エネルギーが湧いてこない。

一番文句を言いそうな恵一が何も言わないのを、不思議に思うことさえなかった。

「ねえ、ちょっとみんなで体を動かしません？」

突然、和彦がそう言って立ち上がる。「ほら航太先輩、行きますよ。足ももう大丈夫なんでしょ」

相変わらず部員三人の球技部が、校庭でバスケットボールを使ってパス練習をしていた。航太が試合を持ちかけると、すぐに乗ってくる。こっちは文芸部五人のチーム、相手はどこかから友だちを一人引っ張ってきた。

「おれら一応専門だし、野郎四人なんだからいいっすよ、女の子がいるそっちは五人でも」

日向子は、ほとんど戦力にならない。ところが、京が意外に強かった。いや、強いというより、よく走り回るのだ。シュートの精度はそれほどでもないが、とにかくこぼれ球を拾いまくり、ゴールを攻める。

「なんか、色々意外な子だな。⑥本の虫のくせして」

恵一が感心したようにつぶやいたものだ。

やがて、文芸部の三年生は息を切らしてコート脇のベンチに腰を下ろした。球技部の三人は飛び入りの一人をつかまえたままで、またパス練習に戻っている。

「疲れたあ。ねえ、京、和彦、⑦二人で購買部に行って何か飲み物買ってきて。私がおごる」

日向子がそう提案して財布を出したので、あわてて恵一と航太もポケットを探る。二年生二人が仲良く校舎内に消えるのを見送りながら、日向子が言った。

「ねえ、航太、覚えてる？　あんたが地方大会の決勝戦に作った句」

突然だったが、航太は素直に答えた。

「もちろん覚えてるけど？」

⑧今ここがおれのポジション南風（みなみ）吹く

これが、航太の句だ。試合には使われなかったけど。

「だけど今頃、なんで？」

「『今ここがおれのポジション南風吹く』」

日向子は航太の問いには答えず、そう吟じてみせた。

「みんなで話し合って、義貞先生にも意見してもらって、結局航太のこの句、試合には使わないことにしたんだよね」

「うん」

それで当たり前だと思った。自分への迷いを詠んだ日向子の句や、島の高みから見た海を感じさせる和彦の句に比べたら、なんと言うか、幼稚な感じなのは自分でもわかっていたから。

「だけど、あの句、妙に心に残りはしたんだよな」

恵一が、反対側からそう口を挟んだ。「『おれのポジション』って言い方は、たしかにあんまり俳句らしくはないし、『今ここ』っていうのも、なんか、J-POPあたりで使い古されたベタな感じがする。だけど、これを聞いた時、ぱっと、バスケットコートの中でポイントガードを務めている航太の姿が浮かんで、ああ、いいなと思ったのは本当だ。だから迷ったんだが……。あと、正直、審査員にどう評価されるか、読みにくい句だとも思ったしな」

日向子が体を乗り出した。

「うん、そう！　私も、この句は残ったんだよ！　絶対に汗びっしょりかいて大声出して、気持ちよさそうに走ってるんだろうな航太、ってそこまでひとつづきの景が浮かんだの。恵一の言うとおり安全策を取って、使わずに終わっちゃったけどね。でも、わからないよ？　試合に出したら審査員にすっごい評価してもらえたかもしれないよ？」

二人が口々に言ってくれるのを聞いていると、航太はこそばゆくなってくる。

「あ、つまり二人とも褒めてくれてるんだと思うけどさ……、でもあれも、ほかに何も浮かばなくて、ただ屋上に立って南風南風、って風を感じようとしていた時に、ああおれ今ここで生きてるんだって、そういうのをふっと感じただけで」

「それがいいの。今ここがおれのいる場所、そう言い切る単純さが航太のいいところじゃない」

そういった日向子は、まっすぐ航太を見つめた。

「その単純さが取り柄の小市航太が、何を悶々としているわけ？」

「いや、別に……」

航太は口ごもったが、結局二人に話す羽目になった。

「そう……。小市堂に未来はないってお父さんに言われたの……」

「実際、なかった。そういう目でうちの商売を考えたことがなかったおれが、ほんと、単細胞の甘ちゃんだったわけ。だってさ、ばあちゃん、病気になる前はちゃんと帳簿や家計簿をつけていたんだけど、それを見ると笑っちゃうほどシンプルなんだぜ」

「シンプル……？」

「入ってくる金も出る金も、少ないの。まず、店のほうはさ、ほんと、微々たる売り上げしかないんだ。毎月の材料費や光熱費を取り除くと、え、これだけ？　って誰でも驚くくらいの額。でも、家計簿と照らし合わせると、うまい具合に生活費やおれにかかる費用で差し引きほぼゼロになる感じ。もっと笑っちゃったのがさ、うち、おれ結構大食いだと思ってたんだけど、毎月の食費、一万円程度なの。三人で」

「私は自分の家の食費を知らないから何とも言えないんだけど、まあ、多くはないんだろうね」

そういう日向子に、航太は苦笑まじりにうなずいた。

「うん。ほとんど米代と調味料代って感じだった。あとはたぶん、魚も果物も、物々交換なんだ。野菜に関してはもらいもののほかにばあちゃんが家庭菜園やってるしさ。結局たいした金を使わないでも飯が食えるんだ」

「はあ……、すごい［C］だね」

「もっと笑えること教えてやろうか。時々夕食に鯛の刺身とかが出てきてたけど、今思えばいつも、親父が上生菓子を作る日だった。あ、焼き魚やアラ煮なんかはその翌日にもあったけど」

「はあ……」

もう一度日向子がため息のような返事をした。「それってつまり……」

「そう。親父の上生菓子が鯛に化けたわけ」

「それはそれで、いいじゃないか」

それまで黙っていた恵一が口を挟む。

「そんなこと言ったら、おれのうちだって金を出して食料買ってないのかもしれないぞ。食っている魚は当然市場へ出せない半端ものだし、そう言

えばうちも、もらいものはいっぱいあるな。親父もお袋も、新鮮なうちにって配りまくってるから、きっとお返しがどっさり来るんだ」

「それでも、動く金の規模が違うよ」

どう言えば恵一にわかるだろう。漁師の家は、たしかに天候に左右される不安定さはあるものの、基本、大儲けを期待できる。当たれば大金が転がり込む。もちろん、出て行く金のほうも——船の維持費、燃料費、設備費、もろもろ——大きい。何もかもちまちまとしている小市堂とは、スケールが違うのだ。

いつのまにか、二年生二人も遠巻きになって三人の話を聞いていた。日向子は和彦からペットボトルと財布を受け取りながら言う。

「じゃあ、航太、結局進路はどうするの？　どこの大学に行きたいの？」

ずばりと聞かれた航太は、言葉に詰まる。ちっぽけな島の平凡な航太として、小市堂の作業場が居場所になればいいと思っていた。和菓子は贅沢品。その贅沢品を島の人へ届けることを仕事にしたいと。あんなに楽しい美しいものを作って人の生活を豊かにすることができるのなら、こんなにいいことはないと思っていた。

だが、航太の作る菓子を受け取る人が、いないとなれば……。

⑨おれのポジション。

そのポジションは、誰にも必要とされないものなのかもしれない。

「……進学先はこれから考える。あんまり時間はないって須賀には脅かされたけど」

そう言って航太は立ち上がった。みんなに聞いてもらえたら、ちょっとすっきりした。

「とりあえず、今は俳句甲子園、がんばろう」

（森谷明子『南風吹く』による）

**問一**　二重傍線部a～eの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

**問二**　A、Bに入る語句として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　ア　そっと　　イ　こつこつと　　ウ　がたっと　　エ　どさりと

B　ア　こっそりと　　イ　がはは と　　ウ　ふんわりと　　エ　ふっと

**問三**　傍線部③「世知辛い」⑤「腑抜け顔」⑥「本の虫」の意味として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③世知辛い　　ア　生活しづらい　　イ　お金のない　　ウ　人づき合いの悪い

⑤腑抜け顔　　ア　どうしていいか分からない顔　　イ　気力の感じられない顔　　ウ　驚きぼう然とした顔

⑥本の虫　　ア　本を毛嫌いしている人　　イ　読書好きな人　　ウ　本で調べるのが得意な人

**問四**　Cについて、空欄に当てはまる四字熟語として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　晴耕雨読　　イ　自給自足　　ウ　自暴自棄　　エ　本末転倒

**問五**　傍線部①「親父は、航太の返事の途中から首を振り始めていた」とありますが、その理由として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　航太が島の未来について、真剣に考えていることが分かったから。

イ　店のこれからを託すためにも、航太にはよく考えさせたかったから。

ウ　航太の大学進学を考えると、暗いことしか浮かばなかったから。

エ　航太が店の状況について、甘い認識しか持っていなかったから。

**問六**　傍線部②「航太は返事にまた詰まる」とありますが、その理由として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　祖母の容態が心配で、父とこんな話をしている場合ではないと思っているから。

イ　父の問いに何とか答えたいが、父を説得できるような答えが見つからないから。

ウ　島から若い人がいなくなっているのに、自分は何も出来なくてはがゆいから。

エ　知ったかぶりで島のことをあれこれ余裕ありげに話す父の態度が許せないから。

**問七**　傍線部④「相身互いの取引」について、後の問いに答えなさい。

（1）　それは何をどうすることですか、具体的に説明しなさい。

（2）　航太はそれをどういうものだと受け取りましたか。本文中から六字で抜き出しなさい。

**問八**　傍線部⑦「二人で購買部に行って何か飲み物買ってきて。私がおごる」とありますが、日向子がこのような提案をした理由として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　日向子は体を動かすことが苦手で、疲れてのどが渇いてしまったから。

イ　京や和彦の活躍に、何らかの形で感謝の気持ちを表したかったから。

ウ　後輩の京や和彦を気にせず、航太から本音の話を聞きたかったから。

エ　朝から続く、航太と恵一のぎこちない雰囲気を変えたかったから。

**問九**　傍線部⑧の俳句「今ここがおれのポジション南風吹く」について、後の問いに答えなさい。

（1）　季語と季節を答えなさい。

（2）　恵一はこの句から、誰のどのような姿を想像しましたか。本文中から三十字以内で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

**問十**　傍線部⑨「おれのポジション」とありますが、航太が考えている「ポジション」とは、どこで何をすることですか。十字以上二十字以内で答えなさい。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、※源雅通中将（みなもとのまさみちのちうじやう）といふ人ありき、丹波（たんば）中将となむいひし。其の家は四条よりは南、室町（むろまち）よりは西なり。

彼（か）の中将、その家に住みけるときに、二歳ばかりの児（ちご）を※乳母（めのと）抱きて※南面（みなみおもて）なりける所に、ただ独り離れゐて①児を②遊ばせけるほどに、にはかに児のおびたたしく泣きけるに、乳母の③ものしるこゑのしければ、中将は※北面（きたおもて）にゐたりけるが、これを聞きて何ごととも知らで、※大刀（たち）をひさげて走り行きて④見ければ、同じ形なる乳母二人が中にこの児を置きて、左右の手足を取り引きしろふ。

⑤※中将あさましく思ひてよく守れば、ともに同じ乳母の形にてあり。※いづれか実（まこと）の乳母とならむといふことを知らず。⑥然（しか）れば、「一人は⑦さだめて狐などにこそはあらめ※」と思ひて、大刀をひらめかして走りかかりけるときに、一人の乳母かき消（け）つやうに⑧失せにけり。

そのときに、児も乳母も死にたるやうにてふしたりければ、中将、人どもを呼びて、⑨験（しるし）有る僧など呼ばせて※加持（かじ）せさせなどしければ、しばしばかりありて、乳母、※例の心地（ここち）になりて起き上がりたりけるに、中将、「いかなりつることぞ」と問ひければ、乳母のいはく、「若君を遊ばかし奉りつるほどに、奥の方より知らぬ女房のにはかに出で来て、『これは我が子なり』といひて、奪ひ取りつれば、奪はれじと引きしろひつるに、殿の※おはしまして大刀をひらめかして走りかからせ給ひつるときになむ、若君も打ち捨て、その女房奥ざま※へまかりつる」と⑩いひければ、中将いみじくおぢけり。

然れば、「人離れたらむ所には、⑪をさなき児どもをば遊ばすまじきことなり」となむ人いひ［A］。狐のばけたりけるにや、また物の※霊（りやう）にやありけむ、知ること無くて止みにけり、となむ※語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』による）

（注）

※中将…近衛府の次官　※乳母…母親の代わりに、子に乳を飲ませ養育する女　※南面…南側　※北面…北側
※大刀…そりのある大きな刀　※あさましく…驚いているようす　※いづれか…どちらが　※あらめ…あるだろう
※加持…災難や物の怪を追い払うのに行う祈祷　※例の心地…ふつうの気持ち・気分　※おはしまして…おいでになって
※まかりつる…退出した　※霊…たたりをする死霊、または生き霊　※語り伝へたるとや…語り伝えているということだ

**問一**　傍線部①「ゐて」、⑪「をさなき」の読みを現代仮名づかいに直しなさい。

**問二**　傍線部②「児を遊ばせける」、④「見ければ」、⑩「いひければ」の主語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　中将　　イ　乳母　　ウ　人ども　　エ　僧

**問三**　傍線部③「ののしる」、⑥「然れば」、⑦「さだめて」、⑨「験」の現代語訳として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③「ののしる」　ア　非難する　　イ　軽蔑する　　ウ　尊敬する　　エ　大声で叫ぶ
⑥「然れば」　　ア　しかし　　イ　だから　　ウ　また　　エ　そして
⑦「さだめて」　ア　まるで　　イ　不思議なことに　　ウ　きっと　　エ　以前から
⑨「験」　　ア　効果　　イ　貫禄　　ウ　身分　　エ　お金

**問四**　A　に入る語として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　けら　　イ　けり　　ウ　ける　　エ　けれ

**問五** 傍線部⑤「中将あさましく思ひて」とありますが、その理由として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　同じ姿の二人の乳母が、幼児を手に入れるため、お互いの意見を激しく主張し争っていたから。
イ　同じ姿の二人の乳母が、幼児を真ん中において、左右の手足をつかんで互いに引っ張っていたから。
ウ　同じ姿の二人の乳母が、命令を聞かずに幼児を遊ばしていたため、幼児の行方が分からなくなったから。
エ　同じ姿の二人の乳母が、泣き出した幼児の手足を持って、あやしている姿を見て不思議に思ったから。

**問六** 傍線部⑧「失せにけり」とありますが、その理由として適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　中将の大刀を見て恐れをなしたから。
イ　中将の説得に応じようと思い、観念したから。
ウ　本物の乳母の登場に動揺し、あわてたから。
エ　偽者に化けている時間が限られていたから。

**問七** 本文の内容に合うものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一人で遊ばせていた幼児が、見知らぬ女性に誘われて、乳母から離れ、知らない家に連れて行かれた。
イ　僧の加持によって、見知らぬ女に連れて行かれそうになった幼児をなんとか救い出すことができた。
ウ　見知らぬ女から幼児を奪われまいとしていたときに、殿のおかげでその女を追い払うことができた。
エ　幼児を連れて行こうとした女の正体を、僧の加持によって狐だと見破り、懲らしめることができた。

二〇一九(平成三十一)年度　国語入学試験問題

解答用紙

盈進高等学校

受験番号

一

小計

問一
a
b
c
d
れて
e

問二
A
C
D

問三

問四

問五

問六

問七

問八
X
Y
Z

問九
β
α
10
20

二

小計

問一
a
がせて
b
c
d
e
い

問二
A
B

問三
③
⑤
⑥

問四

問五

問六

問七
2
1

問八

問九
1
季語
季節
2
はじめ
終わり

問十
10
20

三

小計

問一
①
⑪

問二
②
④
⑩

問三
③
⑥
⑦
⑨

問四

問五

問六

問七

合計

二〇一九（平成三十一）年度　国語入学試験問題

解答用紙

盈進高等学校

受験番号

## 一

小計

問一
a 下降
b 把握
c 混乱
d 隠れて
e 予感

問二
A ウ
C イ
D ア

問三
読書習慣のおとろえ

問四
映画（無声映画）

問五
イ

問六
本に戻る人

問七
エ

問八
X 記憶
Y 個別性
Z 体を伴った読書

問九
α （例）平均読書冊数が増加
β （例）荷物がかさばらずにすむという利点があるよね。

## 二

小計

問一
a つがせて
b とくい
c しげき
d ごらく
e おぎない

問二
A ウ
B エ

問三
③ ア
⑤ イ
⑥ イ

問四
イ

問五
エ

問六
イ

問七
1 （例）売れ残った菓子と市場に出せない魚や野菜を交換すること。
2 余りもの交換

問八
ウ

問九
1 季語 南風 季節 夏
2 はじめ バスケットボール 終わり る航太の姿

問十
（例）島で父の跡を継いで和菓子を作ること。

## 三

小計

問一
① いて
⑪ おさなき

問二
② イ
④ ア
⑩ イ

問三
③ エ
⑥ イ
⑦ ウ
⑨ ア

問四
ウ

問五
イ

問六
ア

問七
ウ

合計